男性自身

暗がりの煙草

山口 瞳

新潮文庫

男性自身 暗がりの煙草

新潮文庫　　草111-11

昭和五十八年六月十五日　印刷
昭和五十八年六月二十五日　発行

著者　山口瞳

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊀ 印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Hitomi Yamaguchi 1983　Printed in Japan

ISBN4-10-111111-1　C0195

新潮文庫

男性自身

暗がりの煙草

山口　瞳著

新潮社版

3023

目

次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

煙草の火……九
なんのために……一五
梅林……二一
牡丹燈籠……二七
背中を噛む……三三
心の故里……三八
春の海……四四
謎の怪人……五〇
頭上の敵……五六
無くなる……六一
おふくろの味……六七
裸体……七二
青い日々……七七
私の後悔……八三
御祝儀袋……八八
鈴虫……九四
ダウト……一〇〇
名前……一〇六
野球人口……一一二
ダチカン……一一七
寝耳に水……一二二
火事場……一二八
梯子酒……一三四
考える人……一三九
模範家庭……一四四
夏子の失敗……一四九

買いもの……一五四
正月……一五九
ある紳士……一六四
焚火する男……一六九
噴水……一七五
山本さん……一八一
春の嘘……一九六
旧友再会……二〇二
暗がりの煙草……二〇七
花に嵐……二一三
赤い屋根の家……二一八
秋しぐれ……二二三
思いちがい……二二九
子の恩……二三五
女房に似た女……二四〇
オデンの東……二四六
一年……二五一
坊主頭……二五六
恪嗇……二六二
仮り末代……二六七
モトヒゲ……二七三
腰弁当……二七八
解説　村松友視

男性自身

暗がりの煙草

煙草の火

戦争が終ってすぐのころは、煙草の火を借りるということが非常に頻繁(ひんぱん)に行われた。駅で立って煙草を吸っていると、

「火を貸してください」

といって近づいてくる人が必ずといってよいほどにあらわれた。

手に持った煙草を突きだすと、顔を寄せて煙草の先端と先端とをあわせ、頬をすぼめて大きく吸いこみ、一礼して立ち去る。こういう人が三人もあらわれると、なんだかこっちの煙草が減ったように思われたものだ。また、こっちがラッキー・ストライクで先方がバットというときはちょっと損をしたように思ったものだ。

また、火のついた煙草を差しだすと、こっちの煙草をいったん奪って、口もとに持っていって火をつけるという式の人がいた。多分、そのほうが正確であり、だから時間も早くすむわけだが、なんだか汚いようにも、無礼なようにも思われた。喫煙というのは、単に煙草を味わうというだけでなく、口許(くちもと)が淋しい、手持無沙汰である、時間潰(つぶ)しというかねあいがあるのであって、いったん奪われるというのは実に淋しいような、こころもとないような気のするものである。そこで私は、たいていはマッチを貸すことにしていた。そうすると、マッ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

チをそのまま自分のポケットにいれてしまうひとがいた。わる気ではなくて条件反射なのだろう。

私が他人から火を借りることも多かった。私は大量に煙草を吸う。そうすると、煙草はあるのだがマッチが無くなるという場合が度々あった。

おそれいります、申しわけございません、とか言って近づくとあからさまにいやな顔をする人がいた。やっぱり、減ると思っているのだろう。そういうときは、こっちも不愉快になった。喫煙家同士の窮状を察してくれてもいいのにと思ったものだ。手をふって断る人もいた。そうなると、戦後のことで心細い思いで暮していたので、こんなふうな生き方もあるのだなと羨ましいようにも思ったものだ。

一例報告であるが、凄いひとがいた。火を貸してくれと言うと、こっちの煙草をとって自分で点けて、ゆっくりと一服やってから返してくれた。これは親切なのか狡いのか、咄嗟の判断がつかなかった。見ず知らずの人だから汚いような気がして、わからないようにして捨てた。

賭博場では火を貸してくれない。貸してくれというとおそろしい顔でにらまれる。マッチだっていやがる。

ヤクザ者は煙草の火をうまくつかう。火を貸してくださいというのは挨拶なのである。マッチやライターを持っていても借りにくることがある。そうして耳もとで、先日は失礼しました、なんて囁く。

＊　＊

軍隊にいたときも、煙草を吸うときが、私にとってもっとも楽しい時間だった。

あるとき、小隊長に呼ばれて、二人で練兵場の裏の丘にあがっていった。私は初年兵である。

「戦争をどう思うか」

と彼はきいた。どう答えたか忘れてしまったが、きっと、大東亜共栄圏の意味みたいなことを話したのであろう。

何に不自由しているかと言われたときに、すぐに煙草とこたえた。

「タバコ？」

変な顔をしたが、ポケットから金鵄（きんし）を二箱だしてくれた。

「俺は吸わんのだから」

私は急に金持になったような気がした。

また、あるとき、私は同年兵から竹製のパイプを借りた。正しく言えばシガレット・ホールダーであるが、煙草屋のウインドウに埃（ほこり）をあびてならんでいるような安物であるからパイプといったほうがいいだろう。

兵隊は、支給された誉（ほまれ）や金鵄を二つか三つに切ってパイプで吸っていた。

私は、やっと手でつまめるぐらいの短い吸い残しの煙草をパイプにはさみ、吸えるところまで吸って、パイプを返した。そのとたんに殴られたのである。彼の言いぶんは、

「パイプを借りたら、口もとをよく拭いて返すのが礼儀である」

ということだった。どんな時代にも、どんな場所にも解説者がいるものであって、私がもっとも親しくしていた山梨県出身の兵隊もそれを見ていて、お前が悪いと判定した。私もその判定に服した。

これが私にとって、はじめて接した〝世間〟であった。東京の山の手の中産階級の子弟の多い中学校を卒業して、東京の私立大学に入学し、そこを一年で退学したところへ召集令状が来たのである。そういう意味では、私はまるっきりお坊っちゃんであった。

私たちの内務班には、浅草の喫茶店の主人も、東北の博労もイカサマ賭博師もいた。工員も百姓もいた。年齢もまちまちだった。そういう人たちの間には、ちゃんとしたルールがある。それが世間というものである。なぜ、もっと親しくしておかなかったかと悔まれるが、もう遅い。

お坊っちゃんのルールは、こうだ。ひとつ釜の飯を喰い、同じ板の間に寝起きし、これからも生死をともにしようという仲ではないか。パイプに唾がついていたっていいじゃないか。それを拭いて渡すなんて、いやらしいじゃないか。

ところが、世間は、そうではない。私は、軍隊でそういうことを知った。甘ったれのお坊っちゃんのルールは通用しない。

非常に恥ずかしいことを書くけれど、私は、いまでもお坊っちゃんのルールから脱けきれないのである。そのときは気がつかないけれど、あとで、しまったと思うことが一再ではない。

失敗のひとつは、たとえば他家を訪問するときに起る。私がその人の家をたずねて、そこでお酒をいただいたりして長時間にわたって話しこむというときは、その人が好きでたまらないというときに限られる。そういうときに、私はワガモノ顔に振舞ってしまう。すなわちこれは一方的の甘ったれである。

お坊っちゃんのルールでいうと、遊びにきてくれた友人が、のんびりとワガモノ顔にしてくれたほうが嬉しいということになるが、そんなこっちゃ〝世間〟は通用しない。そういう点において私は駄目だ。

＊　＊

長い間、シベリアに抑留されていた友人がいる。三月に一度ぐらいたずねてくる。彼はいつでも庭からはいってくる。気がついたときにそこに立っているので、ギョッとする。電話をかけてこないし、玄関の呼鈴を押すこともしない。江戸川区に住んでいるので、私の所へ来るのに二時間はたっぷりかかる。もし留守だったらどうするのだろう。

「あの人はシベリア呆けなのよ。時間とか距離とかいうのがわからなくなっているのよ。そうだと思うわ」

と女房は言う。途中でパンと牛乳で食事をすませていて、一時間ぐらいいて帰ってゆく。用件はない。

「火を貸してください」

私が煙草を吸っていると、いつでも彼はそう言う。マッチやライターをわたしてもつかわ

ない。

「いや、いいですよ」

そう言って、彼は私のほうにかがみこんで煙草の火をつけるのである。彼の顔が近寄ったときに、いつでも私は女房の言が正しいのではないかと半ば疑ってみるのである。そのときに、私がお坊っちゃんのルールから抜けだせないのは、戦中呆けではないかと考えてしまうのである。

なんのために

ふだんお酒を飲みつけない人がお酒を多量に飲むとどうなるか。

たとえば社員旅行で、そういうことがおこるのである。それも社長・重役以下全員が参加する社内旅行よりも、部とか課による二十人前後の旅行のときに事件が発生することが多い。

ふだん酒場で会ったこともないし、誘っても来ないし、酒の話になると黙ってしまうような人が、飲めないのではなくて、実はいくらでも飲めるタチの人であることを知らされたりする。

あれはいったいどういうことか。酒の味もわかるようだし、その楽しさも知っていて、ふだんは自分からは決して飲もうとしないのである。多分、お酒をこわがっているのだろう。それから、いくぶんかはミミッチイところもあるのだろう。「親方日の丸」だから、飲めるところまで飲んでやれというような。

私は終戦の翌年からずっと会社員を続けている。給料が安くて、思いきって飲むことはめったに出来ないし、酒そのものも手にはいりにくい時代があった。そういうときは、情けない話だが私も社員旅行では倒れるまで飲んだ。わけがわからなくなって直立不動の姿勢で「君が代」を歌ってしまったことがある。翌日は社長にひどく叱られた。キミを見損ってい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com